エッセイ

ー 私の文学館散歩 （十二）ー

近松に導かれ、谷崎、織田に巡り会う散歩

ー または、「私版 大阪散歩地図」作成の試み ー

松村 茂治

知らない街を歩いてみたい

次の散歩の地を大阪に決めたのは、そこが誰もが知る大都会でありながら、個人的には、ほとんど馴染みのない、未知の所だったからである。東京なら、新宿、銀座、渋谷・・・と言われれば、それぞれの町について、私なりの色分けができるが、大阪については、キタとかミナミとか言われても、全くイメージが湧いて来ない。

はじめて大阪に行ったのは中学校の修学旅行のときだった。京都からバスで奈良を経由して大阪に回ったように記憶している。宿泊地は京都だったので、かなりの強行軍だったと思う。そのとき、大阪城に寄ったような気がするが（他に中学生が行くような所があっただろうか？）、遠い昔のことでもあり、ほとんど覚えていない。

その後、大阪に行くことはあっても、いつも仕事がらみで、観光らしい観光はしていない。大阪城の他に行った所と言えば、仕事仲間と食事に行ったついでに登った通天閣と、出来て間もない大きな水族館でジンベイザメを見たこと・・・それに、千里中央駅の近くで会合があったとき、太陽の塔を見た覚えがあるが、それは、そこを訪ねたというのではなく、電車（モノレールだったか？）で、その前を通過しただけのことである。

今、大阪で観光らしい観光をしていないと書いたが、そもそも大阪は観光を目的に行くところではないということが、少し調べてみて分かってきた。

大阪についてもう少し知ろうと思って本屋に行き、さっそく困った。参考になるような本が見当たらないのである。いわゆる観光ガイドブックはあることはあるが、どれも、最近の観光スポットとしては海遊館とＵＳＪ、歴史的なスポットとしては大阪城、グルメといえば、たこ焼きとお好み焼きを紹介する程度のもので、大阪というのはその程度の町だったろうかと訝しく思うのである。

このことは、新書や文庫レベルの教養・啓蒙書を探していて、よりはっきりしてきた。京都についてめぼしい本を挙げると、「京都」「京都〈千年の都〉の歴史」「京都の神社と祭り」「京都の山と川」「古典と歩く大人の京都」「京都ぎらい」・・・と、さまざまなテーマのものが目に飛び込んでくる。奈良についても、「奈良時代」「奈良の寺」「藤原氏」「大化改新」「法隆寺を歩く」「飛鳥」「平城京の時代」「奈良・京都の古寺めぐり」など、それに忘れてはならない亀井勝一郎の「大和古寺風物詩」に和辻哲郎の「古寺巡礼」と、こちらも枚挙にいとまがない。

ところが、大阪について見てみると、「大阪」「大阪―大都市は国家を越えるか」「〈それから〉の大阪」「大阪的」と・・・こちらは数えられるくらいしかない。決して大阪には歴史や文化がないわけでないのに、これは一体どうしたことなのだろう。まるで大阪には文化を大事にしない文化があるのではないか、と思えてくるほどである。

そのように困っていた私に、手を差し伸べてくれたのが「大阪のトリセツ（以後、『トリセツ』と略記）」（昭文社）である。キャッチコピーに「地図で読み解く初耳秘話」とあるだけに、新旧織り交ぜて地図が豊富な上に大阪の町及びその名の由来にも触れられているところが、大阪ビギナーにはありがたい。言わずもがなのことではあるが、ＵＳＪや海遊館を扱っていないところ、そして何よりも、食べ物屋や土産物屋と結託したグルメ・ショッピング情報誌になっていないところにも好感を持ったのである。

大阪は観光地ではなくビジネスの町と決めてしまえば、話は簡単なのかもしれないが、大阪にも歴史や文化はあるわけで、そうした情報が私のような観光客（大阪は観光地ではないというなら、よそ者か？）に十分届いていないのは、大阪にとっても不幸なことではないか。

この点について私は、情報の送り手と受け手の双方に問題があるのではないかと考えるようになってきた。つまり、

送り手について言えば、吉本・たこ焼き・ＵＳＪあたりをワンセットにして売り込めば、客は来てくれると考えているのではないか、そして受け手についても、誰もが知っている二、三の観光スポットと粉ものグルメ以外、大阪には求めていないのではないかと思うのである。しかし、これでは、大阪に豊かな歴史と文化が存在していたとしても、いずれ忘れ去られてしまうのではないか。

そういうわけで、今回の散歩は、誰もが知っている大阪ではなく、私なりの大阪発見の散歩ということになる。

こぬか雨降る御堂筋のたそがれは・・・

知らない街を歩くわけだから、地図を作る必要がある。いやいや、せっかく知らない街を歩くのだから、地図など持ち歩くべきではないという考えもあろう。しかし、限られた時間内での移動となると、偶然の出会いのみを期待しているわけにはいかない。もちろん、地図ならどこでも売っているし「トリセツ」にも載っているが、私にとって必要なのは、市販の地図ではなく、その土地の概略図、言わば座標面を頭の中に描くこと、言わば土地勘のようなものを作ることである。

そのために、手元にある地図をコピーしたりネットから得た情報をプリントアウトしたりして、何枚かの元図を作り、それを一枚に集約して、私なりの概略図を作るのである。これを持ち歩くこともあるが、大事なことは、こうした作業を通して、頭の中に私版の地図が出来上がることが大事なのである。

先述のように大阪ビギナーなので、あまり欲張らず、今回の散歩は環状線の内側と決めた。そこには、南北及び東西に走る道路が、ほぼ碁盤の目状に交差していて、これが移動に際しての座標軸となる。ここでは南北に走る道路を筋（Ｙ軸）、東西に走るのを通り（Ｘ軸）と言い、筋は九本、通りは五本を知っていれば、十分ということらしいが、私は、それぞれ三、四本で用は足りた。

筋と言われて、第一に思い浮かぶのは、御堂筋である。というより、これしか知らないというのが正直なところである。そこを歩いた経験があるからではなく、欧陽菲菲や坂本スミ子の歌声が耳に馴染んでいるからである。確かに、それと並行した道路には、堺筋、松屋町筋、谷町筋、上町筋・・・と、みな「筋」が入っている。

今回、宿泊したホテルは、九筋の中でも中央に位置する御堂筋沿いにあり、南北方向、東西方向に走る地下鉄の本町駅にも近いので、市内探索には便利そうである。

ホテルの、御堂筋側とは反対側にある部屋の窓の下に大きな寺院の屋根が見えていた。朝、鐘が鳴っていたが、時

刻が定時ではなかったように思えたので、僧侶ではなく観光客が撞いていたのではなかろうか。そこは、東本願寺難波別院で別名南御堂、そこから北へ四、五百メートル行った所に西本願寺津村別院、別名北御堂があり、この二つの御堂を結んでいるところから、この筋を御堂筋というのだと教えられ、直ちに納得したのだが、どうしても納得できないことがあった。

私にとっては唯一とも言うべきメインストリートの御堂筋だが、その六車線すべてが北から南に向かう一方通行になっているのは、一体なぜなのだろう。きっと、隣の筋は南から北への一方通行になっているに違いないと思って注意して見ると、その東に位置する堺筋は、五車線全てが南から北へ向けての一通になっていた。地図で確認すると、その間の細い辻は、一本あるいは二本置きに一方通行になっている。道幅を考えれば、それは仕方ないと思うが、五車線、六車線の大通りをなぜ一通にしたのか、そうすることでどういう利点があるのか、その解は得られていない。

東西に向けて走る通りについて見ると、北から順に、国道一号線は曾根崎通り、中之島に沿って走っているのが土佐堀通り、ホテルの近くを通っているのが中央大通り、道頓堀の近くを通っているのが千日前通りと、こちらは「通り」づくしである。

この東西南北の座標軸の中に、訪問先をプロットするのが、次の作業ということになる。

大阪の中に、文化と歴史を見つけようというのが散歩のねらいなので、訪問先を選定する際の一助にしようと選んだのが、近松門左衛門の「曽根崎心中」である。近松の他の作品あるいは西鶴の作品でも良かったのだが、題名に私の知っている地名が折り込まれているこの作品が適当と踏んだのである。そして、それは間違いではなかった。

「曾根崎心中」は、大坂三十三番観音廻りで幕を上げる。この地に点在する三十三ヵ所の観音様にお参りをすれば、罪障が消滅すると言われており、主人公の遊女お初が、客に連れられて観音巡りをしてきたところである。

「一番は天満の太融寺。このお寺の由緒は古く、はるか昔の粋人として有名な源（みなもと）融（とおる）大臣創建の寺」とあるのを見て、いささか驚いた。というのも、九回目の散歩で京都・嵯峨野の清涼寺を訪れたとき、そこが源氏物語の主人公、光源氏のモデルになったと言われている源融に縁のある寺ということを聞いていたからである（本誌　第四十二号）。その源融が大阪にも足跡を残しているとあって、益々、歴史・文化の探求に向かわなければと、思ったのである。

話を、三十三番観音廻りに戻そう。「曾根崎心中」には、

その後、ほぼ全ての寺が歌い込まれている。「・・・二番札所の長福寺（現在は廃寺）・・・法住寺（千里に移転）・・・法界寺・・・大鏡寺（吹田に移転）・・・超泉寺（焼失）、善導寺、栗東寺と天満の札所を残らずまわり、・・・玉造稲荷の観音堂（ここが十番札所）に参詣する。興福寺・・・慶伝寺・・・高津の遍明院（生野に移転）・・・上寺町の長安寺から誓安寺・・・坂の上りはしなやかに、下りは小走りで、上ったり下ったりしながら谷町筋を行く。古歌に詠まれた藤にゆかりの藤の棚（清涼山　和勝院　焼失）に参詣する。十七番札所は重願寺・・・生玉の本誓寺・・・菩提寺・・・六時堂（ここが、二十番札所）、経堂、金堂、講堂、万灯院（以上五寺は四天王寺）、新清水（地図に清水寺とある所か？）に参り、しばらくそのまま休憩する。下寺町に回り・・・心光寺を拝み、・・・大覚寺に参る。さらに金台寺、大蓮寺と巡り廻って、ここは早くも三十番となった三津寺に到着した。・・・白髪町の大福院（廃寺）・・・新御霊社で三十三番の観音を拝み納める」とある。

これらの寺々を地図にプロットしてみると、大阪市のかなりの範囲（と言っても、御堂筋のほぼ東方一帯）に及ぶことがわかる。全行程は二十km強、当時の人たちは一日で巡拝していたというから、皆さんかなりの健脚だったということだ。

この作業をしていて気づいたことがあった。それは、三十三観音の半数以上が、松屋町筋と谷町筋、上町筋の沿道に集中していること、そして、縮尺の大きい地図を開いてみると、南北に走る松屋町筋と谷町筋及び東西に走る千日前通りと逢坂（奈良街道）で囲まれた長方形の土地の中に、数え切れないくらいの卍印があり、そのいくつかが三十三観音と重複しているので、ここを歩けば、私も観音巡りの御利益に預かれると思ったのである。そして、ここを歩くには、もう一つの理由があった。

「トリセツ」によれば、寺の密集するこの辺りは、上町（うえまち）台地と呼ばれ、大阪がまだ海の底にあった頃、この辺りが半島として海に突き出ていたというのである。つまり、この辺りは大阪の背骨（？）とも呼べる所なのである。しかも、この台地の南側を通っている奈良街道には逢坂との名前がついているので、私ははじめ、それが転じて大阪になったのかと思ったのだが、そうではないらしい。「トリセツ」には、大阪（坂）は、この台地の傾斜した地形が「大江の坂」と呼ばれていたことに由来する、とある。いずれにせよ、この辺の坂が大阪の名前の由来らしいので、ここを外すわけにはいかないと考えたのである。

先に引用した「曾根崎心中」の中で、お初が「上ったり下ったりしながら」行ったのは、この上町台地の界隈で、台地の上と下を結んでいる坂は、天王寺七坂と呼ばれている。大通りの逢坂以外は、石畳と石段の風情ある坂道ということもあって、散歩にはもってこいの場所と考えたのだが、この散歩については後述する。

ここで、「坂」ついでに、「トリセツ」の記事を紹介しておこう。大阪は、もともとは「大坂」だったようで、先に引用したように、「曾根崎心中」では「坂」を使っている。それがなぜ「阪」になったかというと、「坂」を分解すると、「土」に「反（かえる）」となり、死を意味することになるので縁起が悪いということから「阪」になったというのである。伊勢の松阪も「阪」を使っているので、これも縁起をかついでのことだったのだろうか？

風の曾根崎、天神様よ、どうぞお願い・・・

出かける前から、大阪に着いたら先ず環状線を一周することに決めていた。それは、この町の広がりを概観しておきたかったから、つまり、X軸とY軸が、実際にはどのような座標面の中に引かれるのかを知っておきたかったからである。そう決めたとき、私は平面的な広がりしか想定していなかったが、「トリセツ」には、「大阪環状線に乗り、ぐるっと一周してみると、大阪平野の起伏がよくわかる」とある。つまり、三次元を体験できるというのである。環状線は、登山電車のように、地勢に合わせて上ったり下りたりするのではなく、常にほぼ同じ水平面を走っているので、土地の低いところでは高架になって地上のかなり上方を、そして土地の高い所では地上とほぼ同じ高さの所を走ることになる。親切にも、「トリセツ」は、「大阪環状線の先頭車両に乗って走る方向を窓から眺めれば、このアップダウンの様子がよくわかる」とも言ってくれているので、運転席の後のガラスに張り付いて、鉄道少年・・・ではない鉄道老人になることに決めたのだった。

確かに、内回り電車に乗って大阪駅を出ると、しばらくは高架線を走ることになる。「ああ、この辺は海だったんだ」と太古の昔に思いを寄せるのはいいが、南海トラフが動いて津波が来たら、大阪の町中がのみ込まれることになるのである。環状線の全十九駅のうち、西～南側に位置する駅は、どれも海抜一メートル程度以下である。そして、南の端の天王寺駅が海抜十七㍍で、十㍍を超えているのはこの駅だけ、つまり、この天王寺辺りが上町台地の南の端に位置するということになる。

環状線に乗ること約四十分、東京の山手線は一周一時間と記憶していたので、それに較べると、やや短めの一周で

あった。

着いた日に環状線に乗ったのは、この町を概観しておきたかったからと記したが、もう一つの理由があった。ホテルにチェックインする前に、寄っておきたいところがあったからである。それは、第一番札所の太融寺と「曽根崎心中」の舞台となった天神の森（お初天神）で、この二つの間は、歩いて十五分ほどの距離なのだが、宿から行くとなると、やや不便な所だったからである。

電車を下りて、自動改札に表示されたICカードの記録に目を遣ったとき、大阪のJRは安いのか？と思ったのだが、そうではなく、私たちは、環状線の、乗ってきた十八駅に対応する運賃ではなく、乗らなかった一駅分の運賃しか払っていないことに気づいたのだった。一見、不正乗車のようだが、これは正規の料金のはずである。

太融寺は、弘法大師縁の寺ということだが、平安時代に、嵯峨天皇の皇子である源融がここに伽藍を建立したことから、融の一字をとって太融寺としたとのことである。京都の清涼寺へ行ったとき、嵯峨野の源融の山荘が、後に嵯峨釈迦堂（清涼寺）になったと聞いてきたが、彼が大阪まで足を伸ばしていたとは、聞いていなかった。案内の僧がいれば、聞いてみようと思ったのだが、どこからか読経の声が聞こえてきてはいたが、僧の姿は一人も見えなかった。

ここの本尊は千手観音で、昔、何処かの寺で、私の守り本尊は千手観音であると聞いたことがあり、一目でもお目にかかれないかと思ったが、それは叶わなかった。

そこから歩いて数分の所にある露天神社（お初天神）は、若い人たちにとっては、縁結びの聖地になっているようで、境内には「素敵な彼が出来ますように！」といった、可愛らしい内容の絵馬がたくさん架けられているが、私には少々理解しがたいところがある。

なぜなら、ここは「曽根崎心中」の最期の場面、遊女お初と醤油屋の手代・徳辺兵が心中の地に選んだ所で、今でこそ、大阪駅の目と鼻の先だが、当時は、町外れの寂しい天神様の森だった所である。浄瑠璃の結末には、「・・・大勢の人たちの回向を受けて、未来成仏疑いのない恋の手本になった」とあるが、二人の最期は、「・・・二、三度ひらめく剣の刃、あっと一声だけあげたお初の喉笛にぐっと通るや・・・えぐり続ける徳兵衛の腕先も弱っていく・・・弱り切ったお初を見ると、両手を伸ばし、断末魔の四苦八苦・・・（自分も早く後を追おうと）剃刀取って喉に突きたて、柄も折れよ、刃もくだけよとえぐり、ぐりぐりえぐりつづけると、目もくらみ、苦しむ息も・・・絶えはてた」と、これでもかというほどの凄まじい最期である。心中の手本というなら分からなくもないが、恋の手本とし

て、大丈夫なのだろうかと心配になるのである。

この結末を、私は、この世では二人の恋は成就できなかった、という所に力点を置いて受け止めてしまうが、この世では添えることができなかったので、死をもって純愛を貫いたという方に力点を置いて受け止める向きもあるのかもしれない。それだからこそ聖地なのだ、それが分からない筆者は、本当の恋愛を知らないのではないか、と言われそうな気がするが・・・確かに、そういうことなのかもしれない・・・

少々脱線をするが、我が国の恋愛聖地の三大スポットの一つが、ここ「お初天神」だとすれば、あと二つはどこになるのだろう。熱海のお宮の松の周りにも、よく若者が集まっている。熱海の隣駅近くにある来宮神社は、縁結びの神様ということで、結婚式場も併設している。そこに予約に来たカップルがそのついでにお宮の松に寄っているとしたら、ここここそ、二人が純愛を貫いた所ではないので、止めておいた方がいいのではないかと、老婆心ながら思うのである。

私は、ラジオも映画もよくは知らないが、数寄屋橋というのはあるのだろうか。そこを、春樹と真知子が出会った場所と受け止めるか、待ち続けたあげく悲劇に終わった所と受け止めるかで、扱いは変わってくるのかもしれない。

もう一つはどこにしよう。ジョルジュ・ブラッサンスが唄ったシャンソンに「幸せな愛はない」という名曲がある。作詞は確かルイ・アラゴン。そのタイトルが真実なら、恋に殉じるのは、究極の愛の形ということになるのかもしれない。すると、曽根崎の天神様に続く第二の聖地は、軽井沢の有島武郎別荘・浄月庵ということになるか・・・。

ああ、恋愛の聖地ではない。私は、大阪の歴史と文化を求めて散歩しているのだった。

越えた七坂、四十路坂

上町台地周辺が、大阪発祥の地ということなので、ビギナーとしては、ここから歩き始めるのが適当と判断した。宿に近い地下鉄・本町駅から、地下鉄を乗り継いで、千日前線の谷町九丁目駅で下りて、上町台地の七坂を一筆書きで通り抜けるようにして、南下することにしたのである。

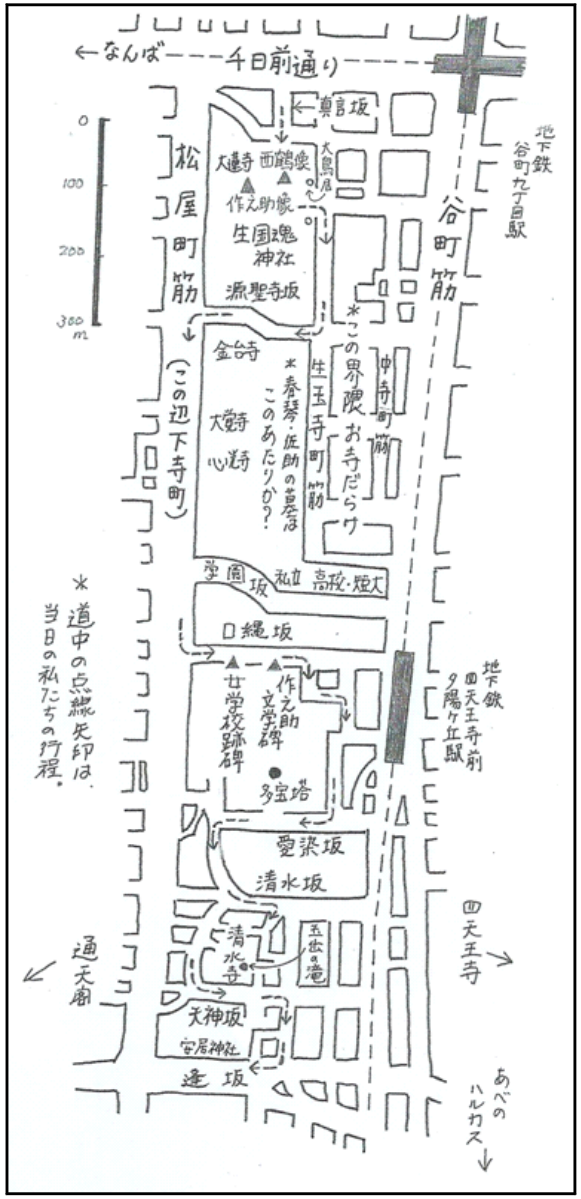
歩き始める前に、天王寺七阪について説明しておこう。向かうのは、北から順に、真言坂、源聖寺坂、口縄坂、愛染坂、清水坂、天神坂、逢坂の七坂である（次頁の地図参照）。一番北に位置している真言坂だけが、南北を向いており、あとはすべて東西、つまり松屋町筋と台地の上を結ぶような形になっている。

どれくらいの時間で、七坂を踏破できるのか、よく分か

ってはいなかった。天気は良かったが、令和五年の九月は、いつまでも夏日、真夏日が続く陽気だったので、熱中症によるリタイアも想定しての道行きとなった。

千日前通りから真言坂を登った所が生国魂神社である。真言坂は、この周辺に真言宗の寺が多かったので、この名前がついたということだが、この坂を上がった先が生国魂神社だというので、改めて、我が国は、宗教に対して大らかと思った次第である。

生國魂神社は三十三番観音巡りには入っていないが、境内に置かれた浄瑠璃神社には、近松門左衛門をはじめ浄瑠璃関係者が祀られ、諸芸上達の守護神となっているとのことであった。



上町台地と天王寺七坂

ここに浄瑠璃神社が置かれているのは、この境内にあった掛け茶屋で、「曽根崎心中」の、お初と徳兵衛の濡れ場が演じられたからだろうと思ったが、後になって、近松門左衛門には、遊女と商人の息子が、この神社の境内で心中事件を起こす生玉心中という、別の戯曲があるのを知った。おそらく、これが理由なのだろう。

境内を歩いていて、井原西鶴の座像に出くわした。西鶴はこの生玉社に大勢の俳諧師を集めて句会を開き、そこでの作品を「生玉万句」として出版しているとのこと、また、別の折りには、ここで一昼夜に数千句を詠んだとも言われており、言わば、ここは俳句の聖地でもあるのだ。

この、西鶴座像からそれほど遠くない所に、中折れ帽を被りマントを羽織った小ぶりの銅像が立っていた。私は、この像の後方から近づいていったので、誰の像なのか全く分からなかったが、正面に廻って説明を読み、それが織田作之助の像であることを知ったのだった。平均的な人間の背丈に較べたらかなり小ぶりに作られた像だったが、それが却って品がよく、マントから伸ばした右手の指に煙草をはさみ、颯爽として歩く姿には動きが感じられて、何とも若々しい、躍動的な姿だった。織田作之助がなぜここに？と思わないでもなかったが、帰ってから開いた「木の都」に、こんな一節があるのを知って、納得したのだった。

・・・それは生国魂神社の境内の、巳さんが棲んでゐるといはれて怖くて近よれなかった楠の老木・・・中寺町のお寺の境内の蝉の色を隠した松の老木であったり、源聖寺坂や口縄坂を緑の色で覆うていた木々であったり・・・生玉の高台、夕陽丘の高台・・・そこは俗に上町とよばれる一角である。上町に育った私たちは・・・

生國玉神社からは、一度坂を下って、松屋町筋に出なくてはならない。下りに使ったのは源聖寺坂で、西に開けた見晴らしの良い坂だった。坂の途中まではやや急な、カーブした階段になっている。階段が終わった所から松屋町筋までは、直線的な緩やかな坂道で、そこに敷かれたやや大きめな石畳は、昔使われていた市電の敷石を転用したものだということだった。松屋町筋に出る右側に源聖寺があり、これがこの坂の命名の由来だろう。

松屋町筋に出ると、次の口縄坂までは、日差しを遮るものの無い中を歩くことになる。筋に沿って、金台寺、大覚寺、心光寺・・・と、三十三番観音に入っている寺が並んでいる。一応門は開いているが、どこも一般客の拝観は想定していないようだった。

次の坂への入口を見落としてしまったのではないかと心

配になる頃、幅二間ほどの路地の入口に、口縄坂の案内板と石の道標があった。

電子辞書で「くちなわ」と入力すると、「蛇」と出てくる。「木の都」にも、「口縄坂はまことに蛇の如くくねくねと木々の間を縫うて登る古びた石段の坂である」とある。現地の説明には、「坂の下から眺めると、道の起伏が蛇に似ているところから、この名が付けられた」とあったが、今歩いてみると、それほど起伏があるわけでもなく、くねくねと曲がっているようにも見えない。むしろ、ここはたくさんの口縄が出没したので、この名前がついた、と言われた方が納得できる。坂は、現在では石畳とコンクリで覆われてはいるが、坂の途中にある夕陽丘高等女学校跡地を示す石碑の周囲には、鬱蒼とした木々が茂り、墓地にも面していることから、今でも口縄が出没しても不思議ではない。作之助自身、この日私たちが寄って来た生国魂神社について、「巳さんが棲んでゐる」と言っているのだから。

「高校の名前を夕陽丘にするなんて、なんだか青春テレビドラマの舞台みたい・・・」という妻に「なるほどね」と相づちを打ったのだが、「木の都」は、「・・・年少の頃の私は口縄坂という名称のもつ趣には注意が向かず、むしろその坂を上り詰めた高台が夕陽丘とよばれ、その界隈の町が夕陽丘であることの方に、淡い青春の想ひが傾いた」と続く。織田作之助の青春時代には、テレビドラマはなかったが、その名に相応しい（?）女学校があった。そして、この坂を登り切ったところに、「木の都」の最後の文章が彫られた石碑が立っている。

口縄坂は寒々と木が枯れて、白い風が走っていた。私は石段を降りて行きながら、もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終わり、新しい現実が私に向き合って来たやうに思われた。風は木の梢にはげしく突っ掛ってゐた。

織田作之助の碑なら、法善寺横町ではないかと思うのは、「夫婦善哉」が真っ先に思い浮かぶからである。そこで、帰ってから読んでみたが、この作品からは、なぜ法善寺横町がこれほどまで有名になったのかよく分からなかった。ひょっとしたら、法善寺横町が有名なのは、「包丁一本、晒しに巻いて・・・」の「月の法善寺横町」のおかげだったのかもしれない。それはともかく、専門家は、文学作品としては、「夫婦善哉」を推すのかもしれないが、私には、青春の瑞々しさを感じさせる「木の都」の方が好ましく思えるので、良い作品が選ばれ、それに相応しい場所に碑が置かれていると感じた。

文学碑の前から、台地の上の、クランク状になった路地をあちらへ曲がりこちらへ曲がりして、愛染堂勝鬘院にたどり着いた。一部の案内書には、「そこには、映画『愛染かつら』のモデルとなった霊木があり」と書かれているので、そして、おそらくは「愛染」（愛に執着する）という名前の効果もあって、ここも縁結びのパワースポットとされているようだが、川口松太郎の「愛染かつら」とは直接的な結びつきはなさそうだった。

後で調べてみると、愛染かつらという木はなく、桂の木にノウゼンカズラが巻き付いているところが、男女が寄り添っているように見えるから、というのが縁結びの由来とのことだが、巻き付いているとなると、寄り添っているというより、私はもっと官能的な場面を想像してしまう。

本堂の裏手にこぢんまりとして品の良い多宝塔があった。これは、大阪最古の木造建築とのことである。この多宝塔を眺めながら小休止をとった。背後の建物の中から、ずっと読経の声が聞こえていたが、僧侶の姿は見当たらなかった。足を休め喉を潤したところで、門のすぐ前から始まる愛染坂を下って、次の目的地、清水坂に向かった。清水坂へは、松屋町筋には出ず、一本手前の路地を進むことになる。

清水坂は、この日歩いて来たどの坂よりも、道幅が広く、上空を遮るものがないので開放的な感じがした。登り口に、車止めの石柱が立っているのは、十分、車が通れる道幅だからだろう。

坂を上りきった右手に墓地が広がっていた。清水坂の名前の元となった、清水寺の墓地だろう。そこは、造成されて間もない墓地のようだった。そう見えたのは、墓石がまだ新しく、一斉販売されている建て売り住宅のように均一な感じに見えたからである。

そこは高台にあるだけに、見晴らしが良く、墓石の間を抜けて、一番見晴らしの良い所まで来ると、なんとそこは清水の舞台状になっていた。ただし、京都の清水の舞台の何十分の一かの大きさで、木組みではなくコンクリート製のベランダのような作りではあったが、高台にあるだけに、前方が遠くまで見渡せるようになっていて、視線の先には通天閣が見えていた。

妻は、ここの墓石がどれも明るい灰色をしているのが気になったらしく、たまたま近くで作業していた庭師に声をかけていた。私は、出来たばかりの墓地なので、同じ材料で墓石を用意したのだろうとしか考えていなかったが、全ての墓石がほぼ同じ色調なのは、言われて見れば、確かに見慣れない光景だった。しかしながら、問われた庭師は、特に気にならないようで、ここの墓石が特に意図的に均一

にされているわけではないだろうとのことだった。その後、母の一周忌法要があったので、菩提寺に行ったついでに改めて周囲を見渡してみると、こちらは、黒かったり緑がかっていたり、赤かったり、そして多くは苔が生えていたり風化が進んで文字が読みづらくなっていたりして、清水寺の墓石とはずいぶんと様子が違っていた。

庭師が作業をしていた急な石段を下りて、この丘陵地帯ではここにしかないという滝（玉出の滝）を見に行った。丘陵の岩の間からしみ出すのだろう、京都の清水寺と同じように、三筋の滝が落ちていた。

そこから、清水坂を登るまでたどって来た、大通りから一本中に入った路地に戻り、天神坂に向かった。坂の途中に、安居神社へ登る急な石段があり、逢坂へはそれが近道のようだったが、私たちの目的は七坂踏破だったので、石段を横目に見ながら、緩やかな石畳の坂道を進むことにした。上り詰めたところで右折して直進し、出たところが七坂の最後、逢坂すなわち国道25号線（奈良街道）だった。

逢坂は、この日歩いて来た六つの坂とは趣を異にした、車の行き交う幹線道路で、歩くことが楽しくなるような坂ではなかった。先にも記したように、当初、私はこの「逢坂」が「大阪」に転じたものと思っていたが、そうではなく、「トリセツ」には、「聖徳太子が仏教導入に反対した物部氏と討論するために『逢った』場所と言う伝承があることからその名が付いた」とあった。聖徳太子と言えば、奈良・斑鳩が本拠地と思っていたので、隣の県とはいえ（当時、県はまだ制定されてはいなかったが）、電車もバスもない時代に、良くここまでお越しになったと思う。そして、聖徳太子と聞いて、二十年ほど前、仕事がらみでこの近くまで来たとき、四天王寺に寄ったことを思い出した。金堂も五重塔も鉄筋コンクリートだったが、そのときも太子縁と聞いて、どうして太子が・・・と思ったのだった。逢坂は別名奈良街道だから、斑鳩の太子とのつながりがあっても不思議ではないのかもしれないが、千五百年も前のこととなると、どんな風に移動して来たのか、気になるところである。

こうして、大阪のルーツを感じるつもりで始めた散歩だったが、私にとっては、思わぬ人物とのつながりがあることが分かり、収穫の多い散歩となった。

あの人もこの人も、そぞろ歩く宵の街

口縄坂にある作之助の文学碑の文面を読んでいたとき、その出典について知識のなかった私は、字形が似ていることとそして石に彫られいるために陰影の影響もあって、そこに彫られている文字を「水の都」と読んでいた。昔から、

大阪は水の都として有名だったこともある。しかし、しばらく見ているいちに、どうも「水」ではないような気がしてきたのである。

「木」を「水」と取り違えたことには、妻が、大阪に行ったら、大川クルーズをしたいと言っていたことも影響していただろう。クルーズを勧めてくれたのは、妻の職場の同僚で、水辺がずいぶんと整備され、水もきれいになって、大阪が〈水の都〉を取り戻したというのである。

船着き場は、JR環状線の大阪城公園駅の近くなので、御堂筋沿いのホテルからは、少し行きにくいところだが、少し寄り道をすれば、却ってもう一つの大阪散歩が出来て都合がいいと踏んだのだが、この欲張りがなかなかの曲者だった。つまりそのために、半年後、私たちはもう一度この地を訪れる羽目になってしまったのだが、そのことについては後述する。

この寄り道の参考にしたのは、宿泊していたホテルで手に入れた「散歩マップ」である。そこには、北浜・中之島界隈に点在する築百年ほどの近代建築を巡る散歩コースが紹介され、そのキャッチコピーには、「歴史と近代建築の街並みを楽しむ。過去から現代へ。歴史を残す生きた近代建築から、現代に移り行く、ここにしかない大阪風景を楽しむ」とある。ひょっとしたら、私たちが求めていたのは、大川クルーズではなく、こういう散歩ではなかったかと思ったのだが、この散歩マップに気づいたのは、船を予約をした後だったのである。

ホテルから御堂筋を北に向かい、先ずは、「大阪ガスビル」までやって来た。窓を小さくとった重厚な感じのする白亜のビルで、通りに面した角は曲面になっていて、いい時代の建物であることは想像できた。案内によれば、設計者は安井武雄、一九三三年の竣工とあるから、ちょうど築九十年ということになる。

その前で御堂筋を渡り、平野通りから堺筋経由で北浜に向かうというのがお勧めの散歩コースだった。

路地をいくつか横切って堺筋に出た所の右手のビルに、目を奪われた。見るからに、古い、そして凝った造りのビルである。窓の上の像は店を守るグリフォンだろうか、そして、正面の壁面には、最上階まで直線上に並んだ彫刻（？）があしらわれており、ずいぶんと手の込んだ建物であることが分かる。表札には「生駒時計店」とあり、覗いて見ると現役の時計店の店舗のようだ。建物の真下からは見えなかったが、少し離れた所から眺めると、屋上部分に、古い感じの時計塔があり、なるほどと思ったのである。設計は宗兵蔵、竣工は一九三〇年とある。

その「生駒ビル」の斜向かいにある大きな木造二階建て

の建物が気になったが、散歩マップには何の説明もなかった。おそらく、近代建築の範疇には入らないからだろう。それに、そこに行くには五車線もある道路を渡ることになるので、億劫になり寄らずじまいだったが、そこは「旧小西家住宅資料館」であることが、帰って来てから分かった。

小西家は、薬種業として創業し、後に工業薬品や化学薬品に事業を発展させていった会社ということで、私とは縁もゆかりもないところと思ったのだが、接着剤の「ボンド」のメーカーとあったので、慌てて机の引き出しに入っている接着剤を取り出してみると、確かに、「道修町・コニシ」とある。赤いキャップの黄色い容器に入った「木工用ボンド」は、日本人なら、誰もが一度は手にしたことがあるだろう。私が割れた陶磁器を修復するのに世話になっているアロンアルファにも、道修町・コニシとあり、急に親しみを覚えたのである。ああ、散歩を続けよう。

堺筋を北に向って、「高麗橋野村ビル」（設計は安井武雄）、「新井ビル」（かつては銀行の支店だった）、「大阪取引所」と近代建築を眺め、石のライオン像が見守る難波橋（設計は宗兵蔵）の手前まで来たとき、しばらく姿が見えなかった妻がどこからともなく現れ、「谷崎潤一郎の春琴抄の記念碑があるって、道端の案内に出ていたけど、通り過ぎてしまったみたい。戻ってみる？」と言うのである。谷崎と聞いて、行かないわけにはいかないと思いながらも、わずかな距離とは言え、戻るのも忌々しく、「今度来たときでいいか・・・」と答えたのだった。結果的に、この一言が、もう一度ここに来ることを急かしたのである。

マップの中に、「くすりの道修町資料館」とあるのには気づいていた（大阪人以外で、「道修町」を「どしょうまち」と読める人がどれほどいるだろう）。そこは、堺筋から路地をほんのわずか入った所だったのだが、特に興味もなく寄らずじまいだった。それくらい、私たちは、道修町の何たるかを知らなかったのだが、そこは、東京で言えば、秋葉原の電気街、合羽橋の道具街のように、薬品に特化して発展してきた街のようである。

この町を東西に貫く道修町通り沿いには、塩野義、武田、田辺など、いくつもの製薬会社の本社があり、それぞれが展示施設を展開していて、「ミュージアム・ストリート」となっており、急ぎ足であったが、そのいくつかを覗いてきた。製薬会社の本社と言えば、この文章を書いている令和六年三月、「紅麹」問題が報じられているが、製造元の小林製薬も道修町にある。所在地は、堺筋からは遠く、御堂筋を越えたガスビルの裏手にあたる。

「道修町資料館」は、そうした薬の町の中心的展示施設で、薬の町の守り神である少彦名（すくなひこな）神社（日本医薬総鎮守、

病気平癒・健康成就の社、別名、神農さん）の一画にある。そして、春琴抄の記念碑は、この神社の入口に、資料館と向き合うようにして立てられている。

薬問屋のあの人に・・・

はじめて「春琴抄」を読んだのは、高校生のときだった。盲目の、琴・三味線のお師匠さん春琴にまつわる話・・・というより、春琴に一心同体化すべく、自らの目に針を刺して盲目となった男の話ということは覚えているが、物語の舞台も話の展開もほとんど覚えていない。だから、この日歩いてきた道修町に碑があると言われても、作品とこの町を結びつけることはできなかった。この日持ち歩いていたどの地図にも、碑のことは出ていなかった。

「春琴抄」の冒頭に、「春琴・・・大阪道修町の薬種商の生まれで」とあるので、ここに碑がある理由は直ちに得心した。それに続いて、「歿年は明治十九年十月一四日、墓は市内下寺町の浄土宗の某寺にある。（春琴らの墓所を訪ねた語り手が案内を請うと）東側の急な坂路になっている段々の上の方へ連れて行く。知っての通り下寺町の東側のうしろには生国魂神社のある高台が聳えてゐるので、今でいふ急な坂路は寺の境内からその高台へつづく斜面なのであるが、そこは大阪にはちょっと珍しい樹木の繁った場所で・・・」とある。

某寺がどこなのかはっきりはしないが、「下寺町」と「東側の急な坂路」それに「浄土宗」を手掛かりに探してみると、三十三観音で言えば、心光寺、金台寺、光明寺あたりが該当する。前日、私たちは源聖寺坂を松屋町筋に下り、少し南に進んでから口縄坂を東に上ったのである。これら三寺は、この二つの坂で区切られた一画に位置しており、その背後の斜面は「生国魂神社のある高台」である。そして、谷崎は、そこが「大阪にはちょっと珍しい樹木の繁った場所」であると書き、それから十年ほど経って、織田は、「大阪は木のない都だといはれているが、しかし私の幼時の記憶は不思議に木と結びついてゐる。（中略）源聖寺坂や口縄坂を緑の色で覆うていた木々であったり・・・」と書いている。

春琴抄の碑文は、帰ってからネットで読んだ。そこにはこうある。

「春琴抄」（昭和八年・一九三三）は、谷崎潤一郎が道修町を舞台に借りて、松子夫人に対する思慕を、架空の人物―幼時に失明した琴三絃の天才春琴と、彼女に献身的に仕える佐助に託して創作した、日本近代文学史上屈

指の名作である。

私は、「春琴抄」は、俗に言うマゾヒズムの極致を行く小説だと思っている。春琴は、「もともと我が儘なお嬢様育ちのところ」に彼女特有の意地の悪さが加わって、身の回りの世話を任されていた佐助に辛く当たり出すのであったが、佐助の方にも、もともと備わっていた性癖なのか春琴との関係の中で次第に育まれていったものか、「それを苦役と感ぜず寧ろ喜んだのであった。彼女の特別な意地悪さを甘えられてゐるやうに取り、一種の恩寵の如くに解したのでもあろう」というのである。春琴は、佐助への三味線の稽古中に、「『阿呆、何で覚えられへんねん』と罵りながら撥を以て頭を殴り、弟子（佐助）がしくしく泣き出すことも珍しくなかった」と、言葉と暴力で責め立て、周囲の者が止めに入ることも珍しくなかったようだが、他方、佐助の方は、弟子に辛く当たるのもすべて芸のためだという春琴の言葉を聞いて、「無限の感謝を捧げた」というのである。春琴の持つ嗜虐性と佐助のもつ被嗜虐性は一枚の貨幣の裏表、言わば、佐助あっての春琴であり、春琴あっての佐助ということになる。

佐助の身のつくし方については、小説を読んで頂くのに越したことはないが、一つ二つ例をあげれば、寒い冬の夜、床に就いた春琴の「足を温めよ」の求めに応じて、裾に横臥して、我が胸に春琴の足をおしい抱いて暖めるといったことは序の口で、二人の世話をしていた女は、「お師匠様は厠から出ていらしっても手をお洗ひになったことがなかった。なぜなら、用をお足しになるのにご自分の手は一遍もお使ひにならない。何から何まで佐助どんがしてあげた。入浴の時もさうであった・・・」と、語り手に述懐している。

以上は、小説の中での話である。しかし、谷崎は、現実生活の中で、まさに佐助のような状況に陥っていて・・・いや、自分自身をそういう状況に置くことによって、創作に当たったのではないか。

二〇一五年に「谷崎潤一郎の恋文」が発行された。私は、たまたまその前の年に、芦屋にある谷崎の旧居倚松庵を訪れたのをきっかけに、このシリーズを書き始めたのだった。そんなことがなければ、「恋文」を読むこともなかったろう。読んでみて、以下に引用するような文章を、どう受け止めたらいいのか分からなかったのだが、今回、春琴抄の碑文を読み、また、改めて「春琴抄」を読んで、今まで断片的だったことが一つの線でつながったように思ったのである。

出版された「恋文」の帯（俗に言う、腰巻き）に、「『春琴抄』『細雪』など数々の名作のモデルとなった姉妹と文豪がかわした書簡の全貌」との宣伝文句がある。モデルと言われると、姉妹の誰かが嗜虐癖の持ち主だったのか、と考えたくなるが、そういうことではなさそうだ。

潤一郎から松子への書簡

昭和七年十月：・・・あなた様といふものがしまいにはますます貴く見え出して、神様のやうに思へて来るでございませう、これではとても夫婦などといふきにはなれませぬ、一生主従の関係でいる外はございませぬ、先日のやうに御腰をもませて頂きますのがどんなに私には幸福に感ぜられますか・・・私をいじめてやるのが面白いと仰いましたが、どうぞどうぞ御気に召しなすまで御いじめ遊ばし下さいまし、体も心も差し上げました私でございますからどんな辛抱でも御奉公でもいたします。どこまで私があなた様に忠実であるか・・・

昭和八年七月：・・・朝夕御側に置いて頂いて、飼犬を訓練遊ばすやうに遊ばして下さいませ、今に必ず忠義の一念で凝り固まり、御寮人様の御神経の一部のやうに動くやうな人間になれると存じております。（ああ、さうなりましたらどんなに私は仕合わせでございませう、一日でも早くさうなりたうございます）自分の崇拝するお方の御意志の通りになり絶対にそのお方に服従いたし肉体的にも精神的にも奴隷として頂くことは矢張り常人には容易に摑めぬ一つの幸福だと存じます・・・

「春琴抄」を読んでから、改めて「恋文」を拾い読みしてみると、そこに綴られているのは、実在の人物に向けての書簡というより、虚構上の人物同士のやり取りのように思えてきて、どちらが小説でどちらが恋文か分からなくなって来るのである。

「春琴抄」には、「春琴を九天の高さに持ち上げ百歩も二百歩も謙ってゐた佐助」とあるが、これは創作にあたり、谷崎が自らに課した制約だったように思えてくる。

ああ、ああ、ここは大阪・・・

歴史的建造物は、外から見ているだけでも面白いと思うが、できることなら中に入って見たいし、詳しい説明も聞いてみたい。そして、その建物が現役として使われているなら、そこに参加してみたいとも思う。しかしながら、生駒時計店のように、現にそこで商売をしているとなると、時計はそっちのけで建物の中を見て回るようなことはでき

ないし、ましてや店員さんをつかまえて、商売の邪魔になるような質問をするわけにもいかない。

一回目は、知らない街を歩いてみたいと思って始めた散歩だったが、何も知らないと肝心なことを見落としてしまうように思えたので、少し準備をしてから、再度この町を歩いてみようと思ったのである。

現役の建物に参加できないかと考え、調べてみると、格好の場所があった。その一つが、「大阪ガスビル（登録有形文化財）」である。ここの八階には「ガスビル食堂」があり、一般客も受け入れているという。しかしながら、名門であるだけに、簡単には入れそうにない。予約もなく受付に行ってみると、その日は三時半まで満席だと告げられ、翌日の一時半に予約したのだった。

出入りする人たちを見ていて、ここは、近くのビジネスマンたちのご贔屓の場・・・いや、ビジネスマンOBたちが旧交を温める場、それに、浪華マダムたちが夫抜きのひとときを謳歌する場・・・そんな印象を持った。

私たちは、ランチのコースを頼んだのだが、最初に出て来た料理（まさに前菜）に意表をつかれた。楕円形をしたガラスの器に、小ぶりのセロリが一本載せられて出て来たのである。それを、そのまま、あるいは塩で食べるのだが、これはこの店の開店以来のメニューだという。このひと皿で、十分訪ねた甲斐があったと思った。こうしたシンプルなサービスは、決して珍しいことではないと思うが、家に戻って、同じような皿にセロリを載せて食してみても、決して、同じようには味わえないのが不思議である。

ガスビルの目玉は、この食堂だけではなく、建物南側の軒下に置かれたベンチであることも、特記しておかなくてはなるまい。木製のベンチは、ちょうど家庭の床暖房のように、温水が循環していて（さすが、ガス会社！）ほんのりと暖かいのである。私たちが二度目に訪ねたのは寒風吹きすさぶ一月下旬、このビルの前を通る度に、お尻を暖めてきた。このベンチを教えてくれたのは、大川クルーズを勧めてくれたのと同じ知人である。彼は、この地でお得意先を回るような仕事をしていたと聞く。きっと、いい仕事が出来たに違いない。

ガスビルの前で御堂筋を渡り、一本中の路地を北に一区画ほど行った所に、芝川ビル（登録有形文化財）という、石造り三階建てのビルがあるはずで、半ば当てずっぽうで行ってみると、道路から建物に向かってカメラを向けている人がいて、難なく見つけることができた。小さいけれど堅牢な石造りのビルで、入口も窓も小さく、外から中は見えない。何となく秘密めいた様子なので、通りすがりの者が入っていいものか躊躇したが、入口付近に、テナントの

案内らしき看板が出ているので、入ってみた。

入口に、起工大正十五年、竣工昭和二年とあるから、ここも戦火を免れてきた建物のようだ。現役の、いわゆる雑居ビルと思われたが、入っているのは夜間営業の飲食店なのか、中は暗くひっそりとしていた。一階の一部屋に電気がついていることに気づき、覗いてみると、洋菓子店が営業中だった。私たちと同じように恐る恐る入って来て、すぐに出て行く若い女性がいた。何処かの店に用事があるというより、彼女も私たちのように、建物を体験しに来たような様子だった。

そこから、中之島に渡るべく、梅檀木橋（せんだんぎ）を目指して路地を行くと、間もなく、ベージュの石壁にステンドグラス風の大きな窓を備えた教会が見えてきた。扉の脇に浪花教会の表札が出ていた。設計は彼のウィリアム・メレル・ヴォーリスとあり、確かに彼は関西でも多くの建物に関わってきたことを思い出した。入ってみたいと思ったが、扉が固く閉じられているように見えたので、押さずじまいだった。

その先の赤煉瓦ビルは、地図には高麗橋ビルディングとあるが、入口にはオペラ・ドメーヌと書かれている。以前、保険会社の建物だったものを、現在は結婚式場として使っているようだ。設計は、東京駅を設計した辰野金吾とのことだった。

そこから、二、三区画北に進んで土佐堀川を渡った真正面にある赤煉瓦ビルが、大阪市中央公会堂である。先回来たとき、大川クルーズの船上から眺め、次回は近くから見てみたいと思っていたのである。

周囲を睥睨するようにして立つ雄姿に圧倒されるし、重要文化財とされているだけに、どこか近寄りがたい感じがする。受付を指し示す表示もないので、入って良いものかどうか迷っていると、警備員らしき人がいたので尋ねてみると、すぐ先の半地下になった所に入口があると教えてくれた。受付も、入口までの道案内もなく、ずいぶんと愛想のない観光施設と思ったが、ここは現役の公会堂として機能しているということが、後になって分かった。

つまり、ここは観光施設ではないので、一般客向けのインフォーメーションはなく、入場料も取らないということなのだろう。その分、素っ気ないというか、情報不足というか、どこまでなら入っていいのか、どこはいけないのか、はじめての者は戸惑うばかりである。

入口を入った先に展示室があり、ドアも開放されているので、ここは自由に入っていいのだろうと思った。そこで、この建物が、百年ほど前に、株で財をなした岩本栄之助の寄付によって建てられたこと（彼は後に株で大損をし、公会堂の竣工を待つことなく、自らの命を絶ったということ

だった）、設計者に辰野金吾の名前があるが、辰野は監修者のような立場で、原案は別の人物だったこと、老朽化や耐震性の問題から取り壊しの危機に襲われたが、文化財として永久保存が決まり、二十年ほど前に保存再生工事が完了し、今日に至っているとのことである。

展示室の先に、階段が見えていた。前記のように、巡回順路の矢印はないが、通行止めの柵もないので、どうしたもか迷っていると、まだ幼稚園にも行っていないような女の子とその母親らしき女性が降りてきたので、通行可能と判断し、上まで登ってぐるっと一回りしてきた。上の階では、子育て支援の催し物があり、下で会った女の子と母親は、そこへの参加者だったのだろう。

今、これを書くのに参考にしているパンフレット（といっても、一枚の紙を三つ折りにしたリーフレット）は、私たちが入って来たのとは反対側の出入り口に、事務所があるので、そこで声をかければもらえるという貼り紙を見て、いただいてきたものである。この種の案内は入館時にいただきたいと思うが、これも観光施設ではないので、積極的に配付しているわけではない、ということのようだ。

一事が万事この調子で、繰り返しになるが、観光施設ではないので、商売っ気がないのは仕方がないとして、折角の重要文化財なのだから、もう少し宣伝してもいいのではないか、多くの人に訪ねてもらっても良いのではないと思ったのだが、現役の施設だけに、あまり用のない人に来てもらっても困るので、微妙なバランスの上での運営なのだろうと理解した。

今回の散歩で、出かける前に参観の予約をした唯一の施設が「旧小西家住宅資料館」である。前記のように、半年前に行ったとき、周囲の高層ビルの中に、ここだけ純和風の木造二階建ての建築物なのが気になって調べてみたのである。その一部は、先に記したが（五十九頁）、そのとき、入館には予約が必要なのを知ったのだった。

道修町通りに面した、にじり口のような戸を恐る恐る開けて声をかけると、中年に手が届くかという年頃の男性が対応してくれた。ネットでの予約が心配だったのだが、無事登録されているとのことだった。時間まで待合室で過ごすように言われ、そこに備えられたモニターに映し出される「コニシ」の社歴のＤＶＤを見て過ごした。追っつけ他の参観者が来るのだろうと思っていたが、時間になっても誰も現れず、結局、私たちだけのプライベート・ツアーということになった。

この建物は、京都の町屋などと同じ、表屋造り建築で、道修町通りに面した所が店舗・事務所、奥が住居部分とな

っており、一番奥には数棟の蔵がある。築百二十年になる歴史的建造物で、現在は重要文化財に指定されているが、「小西家住宅」としては一九七一年まで、「コニシ」の事務所としては、二〇一九年まで、現役として使われてきたという。

どの部屋も、柱や梁、畳など今では決して手に入らないような築材が選ばれているが、私が一番気に入ったのは、廊下（ここには畳が敷かれている）と前栽を隔てる所に使われているガラス戸だった。輸入物の手漉きガラスのようで、これを通して見ると風景が少し歪んで見えるところに温もりを感じるのである。

前栽というのはいわゆる中庭で、枯山水風な造りに、ここに住んでいた人のこだわりを感じるのだが、その隅に置かれた手水鉢が特に印象に残った。廊下を少し先に行った所に厠があるのだろう。

ここも、戦火をくぐり抜けてきた訳だが、決して何事もなかった訳ではなく、少なくとも二度、焼夷弾に見舞われたとのことであった。手漉きガラスがよくぞ無事だったと思ったのだが、雨戸（雨戸に何か仕掛けがあったような説明だったが忘れてしまった）があったのと、自前の井戸があったので難を免れたとの説明だった。

建物の中をぐるっと見て来た後で、この界隈及びこの建物に関する映像による説明を受けたが、その中に、ここが谷崎潤一郎の「細雪」や「春琴抄」の舞台に使われた旨の解説があった。「春琴抄」の主人公は道修町の住人なので、ここが舞台に使われてもおかしくはないが、作品の中で直接「小西家」と表記されることはなかったと思う。おそらく、舞台設定の参考のために、作者が取材に来たということなのだろうと理解した。この説明を聞いたとき、春琴抄の一場面が思い浮かんできたのだが、それは、先に引用した、「お師匠様は厠から出ていらしっても手をお洗ひになったことがなかった」の一節である。春琴と佐助は、まさにこのような造りの家に住み、畳み廊下を進んで厠まで行き、前栽の隅に置かれた手水鉢で手を洗ったのだろうと想像したのである。もちろん、手を洗うのは用を足した春琴ではなく、手伝いの佐助だったわけだが・・・。

最後に、コニシの事務所として使われていた部屋までやって来ると、案内の男性は、その片隅に置かれた時代物の金庫の前に立ち、「この金庫も最近まで現役でした」と言いながら扉を開け、小箱を取り出した。そこから「記念のお土産です」と言って取り出したのは、「木工用・ボンド」と書かれた黄色いチューブをモチーフにしたクリップだった。

夕陽の丘のふもと行く・・・

予定時間をかなり超過してのプライベート・ツアーを終え、道修町通りに出ると、目の前に観光用の人力車が停まっていた。ここまで運んできた客が降りて、一休みしているような様子だった。今まで、京都や鎌倉で、観光用の人力車を見たことはあっても利用することはなかったが、先ほど見た説明映像の影響だろう、谷崎の短篇小説を思い出したのである。

そこには、男に家を訪ねさせたい女が、家の在処は知られたくないために、夜間、男に目隠しをして人力車に乗せ、町中をぐるぐる回って方向感覚と距離感を失わせて女宅に向かわせるという手の込んだ道行きが描かれている。舞台は大阪ではなく、浅草界隈ではなかったろうか。作品の題名も主人公の名前も忘れてしまったが、人力車での道行きだけは、鮮明に記憶に残っている。

「今、乗せてもらえるのですか?」と問うと、車夫からは、「この後しばらく予約は入っていないからいいよ」との返事があった。「生國魂神社経由で夕陽ヶ丘駅近くまでまで行ってもらいたいんだけど・・・」と告げると、私たちが観光客と分かっているからだろう、「ずいぶん渋い所に行くんですねえ・・・」と言って承知してくれた。

黒塗りの車体に張られた真っ赤な座席に上がるのは、何とも面映ゆい感じがしたが、ここは物語の主人公になりきることに決めた。「オープンカーなので、これがあった方がいいでしょう」と言って、膝掛けを出してくれた。車は、道修町通りから堺筋へ出てまっすぐ進んだので、日本橋で左に折れて千日前通りをいくものと思われた。ほとんど平坦な道ということもあり、車はたいした振動もなく、結構なスピードで進んだ。

大鳥居下で車を降り、少し待っていてくれるよう頼んで、神社境内にある織田作之助の銅像に向かった。しかし、この前、像があった所にたどり着いてみると、あるはずの像が見当たらない。そこには、何の断り書きもなく、空の台座があるだけである。長い間、風雨にさらされてきたので、どこかで修理しているのではないか、と言う同行の妻の言葉に、取り立てて反対する理由はないが、今一つ釈然としない。

大鳥居下で待つ人力車に戻り、像がなかったことを告げると、「やっこさん、何処かに散歩にでも出かけましたかねえ・・・」との答え。こちらの意見の方が、私にはしっくり来るのであった。

これから向かう夕陽丘界隈について、「木の都」には、口縄坂を上りつめたところに路地があり、そこを突き抜けて、「南へ折れると四天王寺、北へ折れると生国魂神社」

とある。私たちは、ちょうどこの逆を辿っているので、生国魂神社から、台地の上の道（生玉寺町筋）を南にまっすぐ行ってもらえば、口縄坂の上に出るはずだったのだが、現在、生玉寺町筋は、その先に建てられた学校によって九十度左に迂回させられ、一旦、谷町筋に廻らなければならなくなっている。そこで、車には、地下鉄の四天王寺前夕陽ヶ丘駅までやってもらって、そこから歩いて口縄坂に向かうことにしたのである。この前来たときには西側から登った坂を、東側から下ることにしたのである。

口縄坂を登りつめた辺りについて、小説には、「下駄屋の隣に薬屋があった。薬屋の隣に風呂屋があった。風呂屋の隣に・・・」とあり、主人公の馴染みの本屋だった善書堂のあった所には「矢野名曲堂」の看板が掛かっていたが、そのレコード店も、小説の終いの頃には店をたたみ、名古屋に引っ越していったということになっている。

「下駄屋や床屋があったのは、この辺りかなあ・・・」などと思いを巡らしながら歩いていると、突然「名曲・・・」の文字が目に飛び込んで来た。そんなはずはない、名曲道は店をたたんだはずだ、と思ってよく見ると、名曲堂ではなく、名曲喫茶とあった。

昭和レトロ風の・・・と言うのは、何とも安直なもの言いであるが、飾りガラスのある木のドア、上下にスライドする格子窓、木を基調にした設え、シンプルだが優美な曲線で縁取りされた椅子とテーブル、暖かい感じのペンダント・ライト・・・持参した織田作之助の作品を読みながら、夕陽を待つにはもってこいの場所だった。「昔この高台からはるかに西を臨めば、浪華の海に夕陽の落ちるのが眺められたのであろう」とあるその場所に、今、私たちはいるのだ・・・。

もっとも、作之助自身は、夕陽もさることながら、「口縄坂の中腹に夕陽丘女学校があることに、年少多感の胸をひそかに燃やしてゐたのである（中略）坂を上ってくる制服のひとをみて、夕陽を浴びたやうにぱっと赧くなったことも、今はなつかしい・・・。」とも記している。

そして、口縄坂を下り始めた主人公は、途中で一人の少年に出会う。「ひっそりと黄昏れてゐる口縄坂の石段を降りてくると、下から登って来た少年がピョコンと頭を下げて、そのままピョンピョンと行ってしまった」。この少年こそ、名曲堂の息子であり、彼の名古屋行きにともなって、名曲堂は店をたたむことになったのであった。

喫茶店にいたのは、どれほどの時間だったろう。コーヒーを飲み終えると、夕陽にちょうどいい頃合いになっていた。

陽は大分西に傾いて、喫茶店の前の路地には人影は見え

なかった。坂の上に立ってみると、改めて、ここが夕陽ヶ丘と名づけられていることが実感できる。上町台地の西の斜面に位置するこの一帯には、確かに西日がよく当たっている。ただし、坂の両側には、建物や塀が迫っていて、坂道を歩く人たちの周囲にはすでに夕闇が迫っていた。

その夕闇の迫る坂を、下りていく人も登って来る人もいない・・・いや、途中まで下りて来たとき、登ってくる黒い人影を認めたのだった。薄暗いこともあって、まさに黒い影にしか見えなかったのだが、すれ違いざまに垣間見た姿に見覚えがあった。今時珍しいソフト帽にマント姿。この場所で見たのでなかったら信じられなかったろうが、彼に間違いなかった。きっと彼は、坂を上りきった所で台地の上の道を北へ折れ、生國魂神社の自分の居るべき所に戻ろうと急いでいたのだろうと理解したが、今や、生玉寺町筋は、新しくできた学校によって迂回させられていることを、彼は知っているのだろうかと心配になった。

補遺

「木の都」にあるように、すでに織田の時代に、この高台から浪華の海に落ちる夕陽を眺めることは叶わなかったわけだから、今となってはなおさらということになるが、少し事情が変わってきた。夕陽ヶ丘の目と鼻の先に、ついに最近まで日本一の高さを誇った超高層ビルがある。そこの展望台からなら見えるのではないかと考え、夕陽ヶ丘を訪ねた翌日に改めて出かけてみたのである。やや雲が出ていたが、作之助も見ることが叶わなかった、大阪湾を赤く染めていく夕陽を眺めることができた。展望台を一回りしているうちに、雲行きが怪しくなり、風花が舞い始めた。

帰りが心配になり、急いで帰路に着いたのだが、大阪駅に着くと、北陸から近畿北部にかけての雪の影響で、すでに列車に遅れが出ているとの案内があった。予約していた新幹線を一時間ほど前の便に変更したが、米原や岐阜羽島辺りでやや長い停車期間を余儀なくされての帰京となった。

参考文献

大阪のトリセツ　昭文社
曾根崎心中 冥途の飛脚 心中天の網島 注訳 諏訪春雄
角川文庫
春琴抄　谷崎潤一郎（現代日本文學大系30　筑摩書房）
木の都　織田作之助（現代日本文學大系70　筑摩書房）